

國學院大學學術情報リポジトリ

見世物小屋の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 見世物小屋, 仮設興行, 担い手, 存続, 衰退 キーワード (En): 作成者: 川津, 寧々 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001657

論 文 要 旨

学籍番号	223212	氏 名	川津 寧々
------	--------	-----	-------

論 文 題 目：

見世物小屋の研究

かつて一つの祭に何軒も立ち並んだという見世物小屋は減少し続け、1998年には5社となり、現在は大寅興行社1社となった。近年は東京都花園神社と福岡県管崎宮の2か所で興行しており、大寅興行社を興行元として劇団ゴキブリコンビナートと雑芸レビュー団のデリシャスウィーツが1年おきに舞台を任されている。都市の祭礼に集まる多くの人たちを魅了した見世物興行は、なぜ消えていくことになったのであろうか。

本研究では、数多く存在した見世物興行社がなぜ1社にまで減少したのかという問いを出発点とし、その中で今日に至るまでどのように存続してきたのかについて、聞き取りと興行を取り巻く現状から明らかにした。そして、需要があるにも関わらず興行を続けていくことが難しい要因についても検討した。

2010年以降の興行を扱う研究がほとんど見当たらないことから、現状の調査・記録をしておく必要があると考え、先の2か所の祭で2016年からフィールドワークを実施してきた。担い手・観客のそれぞれから聞き取りを行い、調査を基にまず現在の見世物興行の実態を明らかにした。

呼び込みが重要であるとされる見世物興行において、大寅興行社では小屋の中で見せる芸を充実させてリピーターを獲得してきた。「いかにお客さんに楽しんでもらうか」という姿勢が存続理由の一つに挙げられる。演者の引退により存続が危ぶまれた際には、舞台を二つの団体に任せて共に興行をするという新しい在り方が選択された。それは人との繋がりを大事にしてきたことで生まれた縁であった。現在の見世物小屋は、大寅興行社から引き継がれた工夫や佇まいと各団体の個性溢れる芸が合わさった、昔と今の見世物小屋を同時に体験できる空間になっている。なんでもありの笑いあえるような一体感のある空間でもあり、他では得られない体感を提供している。

見世物興行の存続には、①興行するための環境を整える要素、②興行を成り立たせる要素、③お客さんからの需要という三つの要素が欠かせない。大寅興行社はこれらの要素を満たし続けてきたが、担い手の高齢化のため①の要素が不足する恐れがある。

後継者の不足には、小屋建てや興行の技術と知識が一朝一夕で身に付くものではないこと、動物愛護や消防の取り締まりによって出来る演目が狭まる中での人を惹きつける見世物の創出、新規興行地で客足を安定させる難しさなどが要因として挙げられる。また、信頼関係が重視される業界のため新規参入しにくいという背景がある。

見世物小屋の減少過程には、まず中身が充実しておらずリピーターが獲得できなかった興行が姿を消し、次いで演者や興行主の不足により存続不可になるという二つの段階があったと考えられる。よって、需要がありつつもなくなる一方となったのである。

キーワード (5語)

見世物小屋 仮設興行 担い手 存続 衰退

